

特集

フィールドワーク×月経

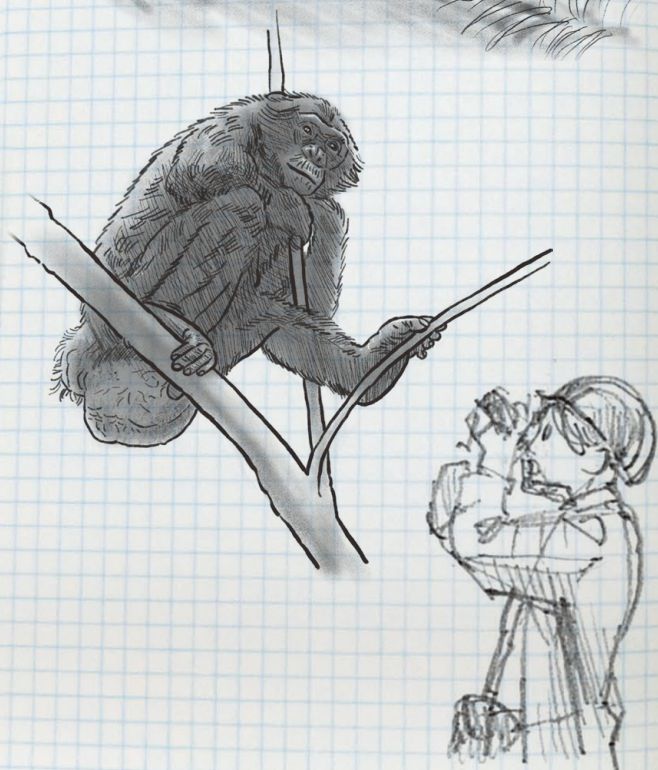
類人猿・人・フィールドワーカー

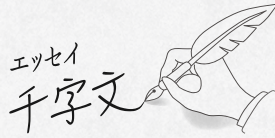
フィールドの月経を知る・語る 新本万里子

生理が「しんどい」のはヒトだけ？ 徳山奈帆子

ウガンダ農村において隠される月経 杉田映理

フィールドワーカーの月経事情 四方篝





言い訳としての月経

おおつか
大塚ひかり

明治生まれの亡き祖母は、夫の仕事の関係で一九三〇年代にニューヨークで暮らしていた。その祖母が、アメリカで何より良いと思ったのは道路が舗装されて綺麗だったことと、生理用ナプキンがあったことだと言っていた。当時、生理用ナプキンは日本ではまだ売っておらず、布や脱脂綿を当てていた。祖母の子ども時代、多くの日本人は着物でノーパンだったため、それらが道に時々落ちていたそうで、生理用ナプキンのおかげでどれほど自由が増したかと語っていた。

こうした祖母の話聞くにつけても、平安時代などはなおさら大変だったに違いないと感じる。平安後期の『とりかへばや物語』では、男の子っぽい姫君と、女の子っぽい若君であるきょうだいだが、それぞれ心の性に従って、就職はもちろん、姫君のほうは男として右大臣の四の君と結婚もする。そうして夜離れもせず通うものの、月に四、五日は、あやしくところせき病(見苦しく窮屈な病)があるので、「物の怪のために体調が悪くなる折々がございませうので」

同じように、月経も言い訳として使われている。薫の囲い者であった浮舟のもとに、薫を装った宮が押し入り、無理やり関係を結ぶ。その翌日には石山寺に参詣するというので浮舟の母が迎えに来る予定であったが、侍女に帰りを促された匂宮は、「母君には『物忌』とでも言っておけ」と指示する。それを受けた侍女は、「姫君はゆうべより『穢れ』(月経)になりました、とても残念なこととお嘆きの様子でしたが、今宵嫌な夢をご覧になったので、今日だけはご謹慎なさいませ」ということで、「物忌」の最中で「ございませう」と、浮舟の母に手紙を書く。月経に加え、夢見が悪かったので物忌をすると、嘘を重ねているのだ。こうした言い訳が成り立つのも優秀な生理用品がないからだ。もしも生理用ナプキンがあれば、匂宮と浮舟の関係はそれ以上深まらなかったかもしれない。月経は今も女を不自由に行っているが、その度合いが大きかった分だけ、物語を動かす力も大きかったわけだ。

プロフィール

1961年生まれ。古典エッセイスト。子どものころから古典文学好きで、大学では日本史学を専攻。『ブス論』(筑摩書房)、『女系図でみる驚きの日本史』(新潮社)、『くそじいといくそばあひの日本史』(ポプラ社)など著書多数。『源氏物語』の全訳(全六巻、筑摩書房)も手がけた。近刊に『ヤバいBL日本史』(祥伝社)。

目次

- 1 エッセイ 千字文
言い訳としての月経
大塚 ひかり

特集

フィールドワーク×月経

— 類人猿・人・フィールドワーカー —

- 2 フィールドの月経を知る・語る
新本 万里子
- 4 生理が“しんどい”のはヒトだけ?
徳山 奈帆子
- 6 ウガンダ農村において隠される月経
杉田 映理
- 8 フィールドワーカーの月経事情
四方 篝
-
- 10 みんぱく回遊
モノを運ぶモノをめぐる
中井 信介
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 ○○してみました世界のフィールド
ウクライナのユダヤ教聖地巡礼
赤尾 光春
- 16 コレクションあれこれ
津波の記憶を守り、伝える
日高 真吾
- 18 シネ倶楽部 M
ワインとの出会いが
あらたな人生を切り拓く
— 「チーム・ジンバブエのソムリエたち」
早川 真悠
- 20 ことばの迷い道
ヒトは困り困われ暮らすもの
吉岡 乾
- 21 編集後記・次号の予告

フィールドの月経を知る・語る

新本 万里子

民博 外来研究員

特集 フィールドワーク×月経 —— 類人猿・人・フィールドワーカー

フィールドワーカーは、食欲にフィールドのことを知ろうとしてきた。
しかし、月経についてはそうではない。自分の月経には一人で対処してきたし、
現地の友人たちがどのように対処しているかも尋ねてこなかった。
では、フィールドで月経から目をそらすのをやめたら、どのような風景が見えてくるだろうか。



パプアニューギニア・セビック地方での調査にむけて、準備中。
生理用品(スーツケース右側の上側、左の青い袋の中)が荷物の一角を占める(2023年)

都市で、農村で、熱帯雨林で暮らしている人びとは、どのように月経(生理)に対処しているのだろうか。そして、女性フィールドワーカーは、訪問先のフィールドで自分の月経にどのように対処しているのだろうか。女性フィールドワーカーにとって、フィールドワーク中の月経対処は大問題である。

。月経はいつ来るのだろうか、どう対処しようか、その心配はフィールドワークの開始前から始まる。ところが、そうした女性フィールドワーカーに、彼女が長年通うフィールドの女性たちの月経について聞くと、あまり多くのことを知らない。自分の月経は大問題なのに、フィールドの女性たちに、彼女たちの月経について尋ねていないのだ。そして、女性フィールドワーカー同士も、情報交換をおこなうことは稀である。このような状態だから、男性フィールドワーカーにとっては、同行する女性フィールドワーカーが月経対処のタイミングをうかがっていることなど思いもよらないことだろう。

この特集は、これまで語られてこなかったフィールドワーカーの月経を語り、フィールドの人びとの月経を知ろうとするものである。そして、哺乳類としての隣人、類人猿の月経も見てみよう！

文化的・社会的な月経

女性フィールドワーカーが、フィールドの月経を知らない理由のひとつは、彼女たちの母国である日本でも、フィールドワークの対象となる地域でも、月経が人目に触れないところで対処されていることにあるだろう。そのうえ、月経について

て質問するのは、ちょっとためらわれる。タブー観が付きまとうのだ。

ところで、このタブー観というものは、フィールドワーカーとフィールドの人びとのあいだで同じものなのだろうか。日本に住むわたしたちにとって、現在、月経は個人的な秘め事である。月経のときは体調が悪くて会社を休みたいこともあるのに、月経による不調のためだとは言いつらい。個人的な秘め事＝私的なことだからこそ恥ずかしいし、会社という公的な場では隠しておきたいのだ。だから、人前では口に出せない、聞いてはいけないというタブー観が付きまとう。

わたしが調査をしているパプアニューギニアのある地域には、月経中の女性たちが籠る小屋があった。月経中の女性たちは、この小屋のなかか、森のなかにいた。月経中の女性が畑に入ることは禁じられており、もしも入ったら、畑の作物は台

無しになってしまおうと考えられていた。月経中、女性たちは、自分たちが食べるものを料理すること

とはできたが、それを男性や月経中ではない女性に渡すことは禁じられていた。食べた人の体や行為、生産物に悪影響がおよぶと考えられていたのだ。今ではこうした考えも薄れてきたが、月経は近年まで社会的に忌避されていた。だから女性たちは、月経期間はあれをやってはいけない、これをやってはいけないというタブー(禁忌)を守っていたのだ。このように、月経をどのようなものにとらえ、どのように対処するのかが、時代や社会によって異なっているのである。

月経する身体

ところで、人と類人猿の月経は、どれほど異なるのだろうか？ 類人猿の月経周期は？ 生理痛はあるのだろうか？ 生態人類学者によれば、



2000年代後半まで使用されていた女性と子どもの住む家。月経時に使用されていた小屋(月経小屋)は、写真の建物と形が同じでより小さかった。調査村で2003年に土間式月経小屋を見たのだが、当時はそれが最後のものとは気がつかず、写真に残せなかった(パプアニューギニア、2008年)



上: 炉を避けて座り網袋を編んでいる女性。普段、彼女の座る位置は炉の横である。月経期間中は家族のための料理はしない(パプアニューギニア、2016年)

下: 町のスーパーの生理用品販売コーナー(パプアニューギニア、2015年)



月経についての特別授業風景。女性教員が女子生徒だけを集めて実施する。カリキュラム外である(パプアニューギニア、2015年)

大型類人猿で月経に注目した研究は少ないのだという。月経が、研究の対象となると思われていなかったのだろうか？ ここにも、フィールドワークをする側の無意識が働いているようで面白い。人は、生理用ナプキンやタンポンで経血に対処するだけでなく、ピルでコントロールしたり、痛み止めを飲んだりする。最近では、月経の来る日を予測したり、妊娠しやすい時期やしづらいつ時期を予測したりするための管理アプリも登場している。フィールドワーカーのなかにも、ピルや月経管理アプリを利用している人がすでにいるのかもしれない。さあ、フィールドの人びとや類人猿の月経についてフィールドワーカーが何を知ったのか教えてもらおう。そして、フィールドワーカー自身の月経をめぐる語りを聞こう。

生理が「しんどい」のはヒトだけ？

徳山 奈帆子

京都大学野生動物研究センター助教

女性ヘルスケアアプリ「ルナルナ」上でおこなわれたアンケート調査によると、月経がある女性の七割が月経前に身体的・精神的不調を経験し、四人に一人が仕事や家事に支障をきたしているという。不調を感じながらも、「月経が来るのは健康の証」「しんどいけどしかたがない」と考えている方は多いのではないだろうか。わたしも数年前までそうだった（現在は低用量ピルの服用によりコントロールしている）。コンゴ民主共和国の熱帯雨林で、ボノボ（チンパンジーと同じく、ヒトともっとも進化的に近縁な大型類人猿）を追いかけて一日一〇〜二五キロメートル歩く普段でもハードな調査に、月経前、月経中はさらに腹痛、頭痛、眠気、生理用品交換の手間が加わるのをしかたがないと我慢していた。

じつは、月経がある動物は少数派だ。ヒトを含む霊長類の一部、コウモリの一部など、哺乳類種のうちたったの二パーセントだけなのだ。これらの動物は、一度に産む子が原則一頭であるという共通点がある。母体は一頭の胎児を大切に育てるために厚い子宮内膜を発達させる。妊娠しなかった場合、その子宮内膜が流れ出るのが月経だ。

るのを観察したことがある。

ボノボが生涯に経験する月経数を計算してみよう。ボノボは八〜九歳で性成熟し（初潮）、一〇〜一二歳で初産を迎え、四〇歳を越えるくらいまで五〜六年ごとに妊娠・出産を繰り返す。初産を八歳〇カ月、初妊娠を一歳〇カ月、生涯に七頭の子どもを産むとすると、初産〜初妊娠までの三六カ月分とその後六回の妊娠前六カ月分の計七二回しか、ボノボのメスは生涯で月経を経験しないのだ！

現代ヒトの「多すぎる」月経

現代の日本人女性の経験する生涯月経数は四

大型類人猿にも月経はあるか？

ヒトと近縁な大型類人猿（チンパンジー、ボノボ、ゴリラ、オランウータン）では、ヒトと同じような周期的な性ホルモンの分泌量変化と生殖器からの出血がみられる。周期もおおよそ二八〜三八日とヒトとほぼ同じである。大型類人猿にも月経があるのだ！しかしながら、野生のボノボを観察して出血を確認できる機会はとても少ない。じつはそこに、現代女性が月経に苦しむ理由が隠されているのだ。

大型類人猿のもつ特徴のひとつが長い授乳期間だ。子が離乳するまでゴリラで三〜四年、チンパンジーとボノボで四〜五年、オランウータンで六〜七年かかる。母乳を分泌しているとプロラクチンというホルモンが分泌され、排卵は抑制されるため月経は起こらない。母乳の分泌量が少なくなると排卵が再開するが、半年ほどで再び妊娠する。つまり、離乳と妊娠のあいだのわずかな期間しか月経が起こらないのだ（ゆえに、観察するチャンスがとても少ない）。どうやらボノボたちにとっても月経を見る機会は少ないようで、子どもが月経中のメスのお尻を触ったり見つめたりする

〇〇〜五〇〇回といわれている。大型類人猿のメスの生涯月経数とくらべて五倍以上だ。しかし、これはこの一〇〇年で栄養状態が改善し、女性の生涯産子数が急激に減少したことによるものだ。江戸時代の女性が初産を迎える年齢は平均一五歳、初妊娠は十代後半、授乳期間は二〜三年程度だったといわれている。そして離乳により月経が再開すると、次の妊娠と出産を繰り返していたのだ。つまり、一〇〇年前までの日本の女性の生涯経験月経数は、大型類人猿とそう変わらなかったのだ。

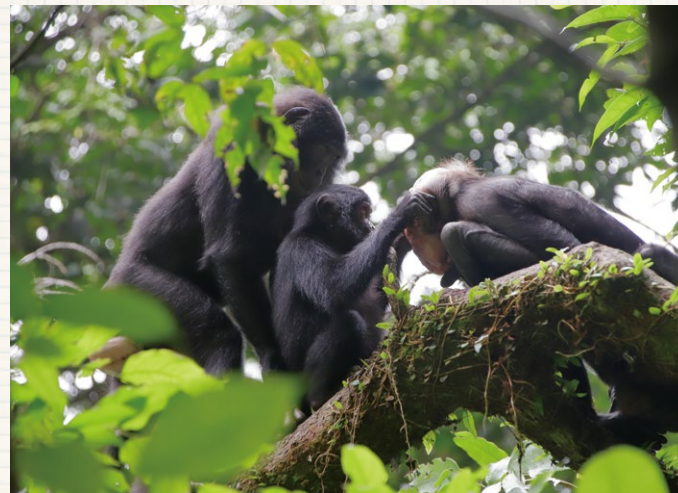
ヒトの月経はそもそも、何十年も毎月起こるようなものではなかったのだろう。現在は医学的



若いメスのボノボ。チンパンジーと同じく、ヒトと進化的に近縁な類人猿だ（写真はすべてコンゴ民主共和国ルオー学術保護区ワンバにて撮影。2013年）



現地のアシスタントとともに、樹上のボノボを観察する著者（撮影：横山拓真、2018年）



月経中のメスのお尻をのぞき込む、コドモメスとその母（2019年）



ちょうど初産が始まるころの思春期メス（2022年）

にも、多すぎる月経数が月経困難症や子宮内膜症などの婦人科系疾患の発症リスクを上昇させると考えられており、月経の回数をコントロールすることが推奨されている。野生のボノボでは、少なくともわたしの目で見てわかるほどに月経痛に苦しむ様子は観察されない。しかし、妊娠出産の機会が少なく月経回数が多い動物園の大型類人猿は、子宮筋腫などにかかることがあるそう。多すぎる月経数が、現代ヒトの月経の「しんどさ」のひとつの要因と考えられるのだ。

ウガンダ農村において隠される月経

杉田 映理 すきた えり
大阪大学教授

見えていなかった月経

「日本ではね、娘が初潮を迎えるとお赤飯を炊いて家族でお祝いするんだよ。地域によっては、ご近所にもお赤飯を配る習わしがあったとか」——そう話すと、わたしのフィールドワーク先であるウガンダ東部の人びとは、そろって驚愕する。その引きつった表情から、そうした慣習が自分たちの社会にはなくて良かった、という心の内が見える。

ウガンダのギスの人びとの文化に初潮儀礼はなく、日々の暮らしのなかでも月経は完全に「隠されて」いる。住み込みの調査も含めて、わたしは長年ウガンダ東部の農村で文化人類学的フィールドワークを続けてきた。しかし、最初の一〇年ほどは、彼女たちの月経にまつわる行動に気

がつくことはなかった。では、ウガンダの女性たちの暮らしに月経はさして影響を与えていないのだろうか。いやいやとんでもない。わたしが、月経に関心をもっていざ聞き取りを始める（冒頭のお赤飯のエピソードはその調査中の会話）、それまでわたしはまったく見えていなかった、彼女たちの行動規範、その背景にある怖れや困りごとが驚くほどたくさん存在していた。

月経にまつわるさまざまな忌避

彼女たちがタブー視して避けている行動のひとつは、農業に関することだ。月経中は、ラッカセイとカボチャの畑に入ってはいけない。果樹に登ることもしない。理由は「不作になったり、実が枯れたりするから」だという。この地域のおも



建設中のポットン便所。この深い穴に落とされた物は拾われることはない(2015年)



町のスーパーにある生理用品の売り場。最近ではウガンダ製も(2019年)



フィールドワーク中の筆者(写真はすべてウガンダにて撮影。2014年)

な農産物はバナナとトウモロコシであり、その農作業はしてもよいというから、習わしとは不思議である。しかし、世界の他の地域を見渡しても、月経期間中に一定の農作業や漁業が禁忌とされる例は多い。

ほかにも、月経中は飲んではいけない飲み物があつたり、月経中は聖書に触れたり、教会の聖歌隊に参加してはいけない、と語る女性が多い。彼女たちは、周りに気づかれぬように、スーツとそれらの行動を控えているのだ。ソーダや牛乳を飲まないのは、経血量が増えるから、という独自の生理学的解釈が理由であり、教会に関するタブーは、キリストを汚さないためという月経に対するケガレ観がうかがえる。

わたしのフィールドの女性たちがもつとも恐れるのは、自分の下着や生理用品に染みついた経血が利用されて、呪い(邪術)をかけられることだ。だから月経対処に利用した使い捨ての生理用品は、ポットン便所に落とす。再利用できる生理用品と下着は、洗濯済みのものでも、僅かに残った経血の染みが人の手に渡らないように細心の注意を払う。干すのは暗い室内の片隅か、外干しでも一枚布を覆って隠すのである。呪いのなかでもっとも怖いのは不妊にされること。そしてそれを呪術師に依頼するのは、伝統的には一夫多妻のこの社会では、父の妻が多いと考えられている。父の他の妻を「お母さん」と呼びながらも、複雑な人間関係がその疑念から透けて見える。

使われなくなったイフンゴ

さて、太古のむかしより人類には月経がある。では、流れ出る経血にどう対処しているのか。どの地域でも伝統的にはその土地にある素材を巧く利用した、環境に適應した術をもっていた。ウガンダ東部もやはり、バナナがおもな農産物であることは述べたが、茎の枯れた部分の繊維を揉んで丸めて作る詰め物

に広がっている。しかし、生理用品が変化しても、捨て方や干し方、経血をめぐる怖れや月経中の行動規範は、変化していないようだ。社会にわたる変化は、月経が、今後どのように変化するのか、しないのか、さらに長期的に追ってみたい。



右上:バナナの茎(偽茎)の部分(2014年)
右下:伝統的な生理用品イフンゴ。バナナの茎の枯れた繊維をほぐして作る(2020年)
左:この地域の主食、バナナ(2019年)

フィールドワーカーの月経事情

四方 篝しかた かがり

京都大学アフリカ地域研究資料センター特定研究員

出発前の葛藤

わたしは中部アフリカ・カメルーンの熱帯雨林地域で、焼畑農耕社会や狩猟採集社会を対象に、フィールドワークに基づく研究を継続している。女性フィールドワーカーにとって、調査中の月経対処は悩みのタネだ。それは出発前の荷造りの段階から始まる。調査期間と自身の月経周期を重ね合わせながら、持っていく生理用品の量を算段するが、調査道具とのせめぎあいになり頭を抱えることもある。現地で購入はいいじゃないかと思うかもしれないが、なんといつても日本製の生理用品は質がいい。薄い・漏れない・蒸れない、の三拍子そろった使い捨てナプキンや、最長8時間の吸収力を謳うタンポンは、月経中でもパフォーマンスを下げずに調査したい女性フィールドワーカーの強い味方となる。

真つ暗な森のなかで

フィールドでの滞在様式は研究内容によってさまざまだが、わたしの場合は村の家庭に住み込んで調査をすることが多い。食事、洗濯、水汲みと居候先にはお世話になることばかりだが、月

経対処は排泄と同じく個人的な領域である。村のトイレは屋根も壁もなく、地面に穴を掘って丸太を渡した簡易的なもので、とくに雨のときには傘とトイレトペーパーを抱えながら生理用品の扱いに四苦八苦する。また、月経中はラッカセイを栽培する畑への出入りを避ける等の慣習があるようだが、月経にまつわる禁忌をすべて把握できているわけではないし、調査中のわたしが遵守できるとも限らないため、月経中と悟られないようにトイレでの後始末にも気を使う。

森でキャンプしながら調査する場合は、そもそもトイレがないので、適当な場所を探して右往左往する。昼間はまだいい。悲惨なのは夜だ。夜中に行く羽目にならないように……と時計を眺めつつ、生理用品の交換に行くインターバルを調整するが、インタビューで話し込んでしまったり、採集物の写真撮影に夢中になったり……と予定外の作業が割り込んでタイミングを逃し、気づけば辺りが暗くなっていたということも少なくない。夜の森は真つ暗だ。憂鬱な気分を抱えつつヘッドライトを装着し、全身に防虫スプレーをして TENT を這い出す。キャンプのそばだと、たき火の明かりで姿が丸見えになってしまうので、光が届か

ずかつキャンプから遠すぎない範囲で身を隠せる場所を探す。人や動物の気配はないか、サファリアリの大群が足元を歩いているか、辺りを見回しながら、夜が明けたときに形跡がわかりにくいような茂みを探し、ここだと決めたらそつとライトを消す（誰かが気づいて、近づいてこないとも限らない）。ひととおりの工程が済むと、次なる課題は使用済み生理用品の処分である。森のなかで経血の滲んだ白いナプキンはあまりにも目立つし、そもそも分解しないゴミを置き去りにはしたくない。隠れて燃やす、穴を掘って埋めるという女性フィールドワーカーもいるそうだが、その行為自体が目立ってしまうので、わたしなどは躊躇してしまふ結局、もれなくお持ち帰りとなり、ビニール袋でぐるぐる巻きにした状態でリュックに入れて持ち歩くことになる。

見えづらく伝えにくい悩み

月経中は森に行かず村で過ごしたいところだが、あるとき、狩猟採集民の長期キャンプに参加できるチャンスが巡ってきた。意を決し四〇日におよぶ森での行軍に参加、貴重な調査経験となったが、調査二日目に月経が始まった。当時の野帳には、月経の始まる前日に「体調悪」の字が見られ、翌



夕暮れどき、煮炊きの煙があがる狩猟採集民の森のキャンプ(撮影:安岡宏和、カメルーン東部州、2020年)



森のキャンプへ向かう狩猟採集民の少女たち(カメルーン東部州、2005年)



月経期間中、車での長距離移動はなるべく避けたい(カメルーン東部州、2018年)



使い捨てナプキン20個(月経1~1.5回分)は野帳12冊分に相当(2023年)

日以後はその日に食べたものと「生理痛」「具合悪し」といった月経痛にまつわる心の叫びだけが続く。調査にならないと決め込んだわたしが、テントの前で穴の空いた靴下を繕っていると、現地の女性が「これも縫える?」と自らの破れたパンツをこっそり持ってきた。縫い直してあげたところ、我も我も……と女性陣からパンツ修繕の依頼が殺到、その日の野帳には「パンツがどこから破れるものがわかった」との記録がある。女性の悩みというのは、見えづらく伝えにくいものだ。だが、彼女のように思いついて話してみること、みんながハッピーになる可能性がある。そんなことを思い出しつつ、わたしは今、この文章を書いている。

世界のバッグ

人はモノをもち運ぶにも、モノを用いる。英語だとバッグ、日本語だと袋、鞆、カゴなどは、モノを運ぶモノを示す包括的なことばだろう。忘れモノをしがちな人は、ふと考えたことがあるかもしれない。「あれ？ 入れたはずなのに」と考えた、はじめての人は誰だろう、と。さて、民博の展示にバッグに類するものを探して、その多様性を考えよう。

素材と形態の多様性

まず、わたしが研究している東南アジアの展示を見よう。竹やラタンなど植物資源を編んだカゴは、アジアの農民が使ってきた定番のバッグである。基本的には背負うタイプで、タイのモン族のカゴは上部に蓋があり、ラオスのカトウ族のカゴは、両側に別に仕切られた部分がある。水筒を入れたりする、最近のリュックサックにとっても似ている。蓋付きのカゴは、わたしが調査してきた二〇〇〇年代以降のタイのフィールドでは見たことがなく、一九七七年収集の展示品は、すでに貴重なものである。展



カゴのなかに食べモノがいろいろ入っている(タイ、2005年)

そして、オーストラリア・アーネムランド地域の編み袋を見たあとには、日本の文化展示へゆこう。アーネムランドの編み袋はパングナス、石垣島のアンツク(早川孝太郎氏が一九三五年に収集)は藁縄、新潟県村上市の山菜用編み袋も縄が、それぞれ素材となっている。これらの袋は、編み目が粗いと思ってもいい。しかし、採集したモノは水分を多く含む場合もあるし、このくらいの粗さが通気もよくて、都合よいのだろう。バッグの素材の視点から見ると、植物資源では木本、とりわけ樹皮も興味深い。そして、動物資源では、何より皮の利用が重要であろう。ただし、皮の利用については、バッグよりは衣装(毛皮を利用)が充実していて、これは高緯度地域に住む民族の展示に顕著である。

モノを運ぶモノの人類史

バッグをもち運ぶに手ぶらで歩く場合、わたしたちは服のポケットにモノを入れたりする。民博の展示を見ると、色とりどりの民族衣装があるが、その衣装にいわゆるポケット



B 樺皮製リュックサック (フィンランド、H0002908)



C サン族の皮製バッグ (ボツワナ、H0204616)



E 村上市の山菜用編み袋 (新潟県、H0131329)



E 石垣島のアンツク(編み袋) (沖縄県、H0017662)

みんぱく回遊

モノを運ぶモノをめぐる

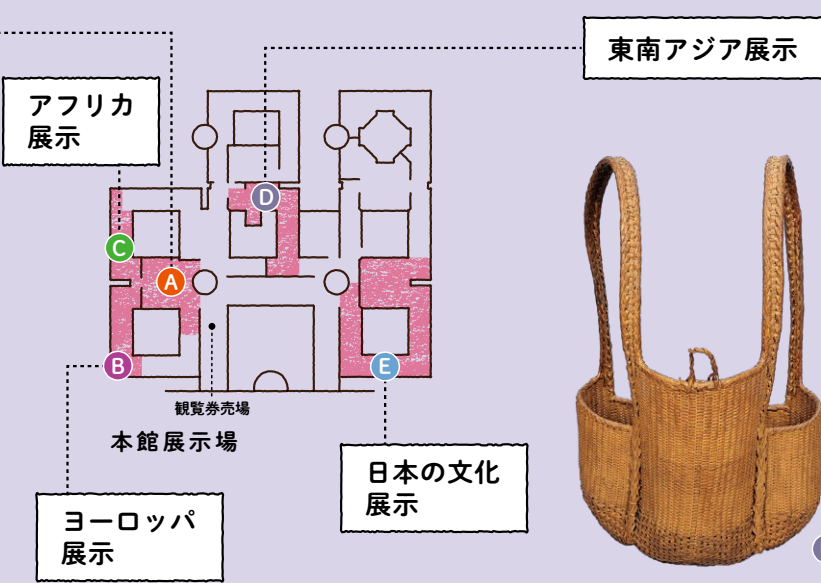
中井 信介
なかい しんすけ
佐賀大学准教授



D ササク族の鶏カゴ (インドネシア、H0104191)



D カトウ族の食糧入れ用背負いカゴ (ラオス、H0178986)



オセアニア展示

東南アジア展示

アフリカ展示

日本の文化展示

ヨーロッパ展示



A アーネムランドの編み袋 (制作:ピリー・シングルトン、1984年、オーストラリア、H0123886)



A ビスマーク諸島の編みカゴ (パプアニューギニア、H0136575)

Hからはじまる番号は本館の標本資料番号です。



D モン族の背負いカゴ (タイ、H0005806)

は付いているだろうか。あるいは和装のように、布の隙間を袋に代えて、モノを入れてきたかもしれない。

このように、モノを運ぶモノの視点は、じつはバッグに留まらない。例えば、乗りモノの類も相当する。現代の車はもちろん、木をくり抜いたカヌーや、竹を束ねた筏(いかだ)家畜に引かせる牛車も含まれる。このような視点で民博の展示を見ると、さらにいろいろな発見があるだろう。

二足歩行を始めたころの人は、バッグをもっていただろうか。ヒモは操れただろうか。手で握って、あるいは頭上に載せてもてる以上のモノを、いつから人はもち運んでいるだろうか。このように考えて、民博の展示のバッグを見渡すと、人類史の長い狩猟採集時代のどこで、人はバッグを作り出したのか(あるいは何かをバッグとして見出したのか)、そして、バッグによる運搬効率の向上は、どのような意味で人の文化を飛躍させたのか、といった問いへのヒントが得られるかもしれない。さて、こうして考えてみると、忘れモノは案外バッグ以前からある、うっかり者をめぐる起源の古い問題なのかもしれない。

示ではわからないが、フィールドワークをしていると、日替わりにいるんなモノを入れていたはずであることが理解できる。このほか、インドネシアのササク族の、鳥を運ぶカゴに注目してほしい。これは片手でもち運べる作りになっている。鶏にちょうどよい大きさで、闘鶏用と、かなり専門用途の品で、運ぶ人の勝負にかけられる想いはどのようであっただろうか。続いて、オセアニア展示に視野を広げよう。ここでは、ミクロネシア・ヤップ島の乳児を運ぶカゴに注目してほしい。素材はココヤシの葉で、先のササク族のモノと共通して、片手でもち運べる。母親が乳児を運び、農業中は木陰に隠して「揺りかごと」としても使われるという。すなわち、バッグがときには小型ハンモックとして、人の睡眠にも関係している。続いて、パプアニューギニア(ビスマーク諸島)の編みカゴの緻密さに目を奪われよう。一九世紀後半に製作されたジョージ・ブラウン・コレクションの一品である。忙しすぎる現代とは異なった、かつて存在した、モノ作りのゆたかな時間の流れを想起させる。

コレクション展示



キリンの胃袋でできた狩猟用の水筒 (H0204777)

「ハンターのみた地球」人類は、かつて皆ハンターでした。ここでは、世界各地のハンターの生きざまをとおして人と動物、人と人とのかわり方を紹介します。人類の狩猟という視点から地球の未来を考えることをねらいとします。

会期 7月6日(木)～8月8日(火)
会場 本館企画展示場の一部

みんなく映画会

「HARAJUKU 原宿」日本に憧れるソルウェーの少女を描いた映画。クリスマス直前、少女を取り巻く環境が一変します。彼女は幸せな社会にたどり着けるのでしょうか。

日時 7月29日(土)13時30分
16時15分13時開場

会場 みんなくインテリジェントホール (講堂)(定員350名)

上映作品 「HARAJUKU」(2018年)

参加費 要展示観覧券(イベント参加費は不要)

解説 安倍オースタッド玲子 (オーストラリア大学教授)
エリック・スウェンソン (映画監督)

※ともにオンライン登壇
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順
※事前申込の方へ、当日11時から本館



イベント予約はこちら

みんなくホームページ
催し物のご案内

https://www.minpaku.ac.jp/event
各イベントについて、詳しくは本館ホームページをご覧ください。

2階会場前にて展示観覧券を確認後、入場整理券を配布します。※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】
友の会先行予約
6月19日(月)～23日(金)、定員70名
【申込先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)

■一般受付
6月26日(月)～7月21日(金)



©Maipo film

イベント
「音楽の祭日2023 in みんなく」
日時 6月11日(日)10時30分～16時30分(10時開場)
30分10時開場
2部制(1部は10時30分開演、2部は13時50分開演)
会場 みんなくインテリジェントホール (講堂)(各部定員400名)

【申込期間】
6月5日(月)まで
主催 国立民族学博物館

主管 音楽の祭日 Fête de la Musique au Japon(日本事務局)

※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順、参加無料
※予約は各部にて受付。
※事前申込の方へ、各部開演30分前から本館2階会場前にて入場整理券を配布します(各部定員300名)。
※当日参加を受け付けます(各部定員100名)。

お問い合わせ先
企画課「音楽の祭日」担当
onyak@minpaku.ac.jp

【QRコード】
5月号本欄に掲載した情報に誤りがありました。本イベントへのご参加に展示観覧券は不要です。

みんなく夏休み子どもワークショップ「フィールドワークに挑戦!」
見る・感じる・描く オーストラリアの先住民アート

日時 7月22日(土)10時30分～15時40分(受付10時)

会場 本館第3セミナー室、本館展示場

講師 平野智佳子(本館助教)

対象 小学4年生～6年生、定員10名
参加費 500円
持ち物 昼食、飲み物

※汚れてもよい服装でご参加ください。
※事前申込制・先着順
【申込期間】
6月23日(金)～
※定員になり次第受付終了

刊行物紹介

■関雄二 監修、山本睦、松本雄一 編
『アンデス文明ハンドブック』
臨川書店 3,740円(税込)

壮大な神祕の出現から、文化遺産をめぐる現在進行形の問題まで、アンデス考古学の最前線を紹介する。アンデス文明の主要なテーマを網羅し、最新成果と研究の醍醐味を平明に解説した、広い読者に向けた書籍である。

■栗本英世、村橋勲、伊東未来、中川理 編著
『かかわりあいの人類学』
大阪大学出版会 2,750円(税込)

フィールドワークの極意と真髄とは何か。「他者」への理解、他者との「共生」に必要な手がかりを探る。

■野林厚志 編
『Making Food in Local and Global Contexts: Anthropological Perspectives』
Springer ※価格については販売元でご確認ください。

本書は現代社会の食がどのように作られているかという人類学的な側面に焦点を当て、グローバルとローカルの両方の観点から研究をまとめたものである。食の人間的な側面を明らかにし、世界の諸地域や民族の食のありかたを浮き彫りにする。

みんなくミュージアムハートナース(MMP)のワークショップ

「点字体験ワークショップ」
日時 6月10日(土)、7月8日(土)
12時～15時30分(最終受付15時)

会場 本館1階エントランスホール
※申込不要 参加無料 当日随時受付

フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「ターベス」を公開

【民博所蔵ミクロネシア資料データベース】
https://fjm.minpaku.ac.jp/micronesia/

【東南アジア・オセアニア―海辺のくらしと物質文化データベース】
https://fjm.minpaku.ac.jp/maritime/

計報 庄司博史名誉教授
本館の庄司博史名誉教授(73歳)が5月4日に逝去されました。専門は言語学・言語政策論。本館には1980年に助手として着任され、トランスボーダープロジェクトの研究プロジェクトをリードしたほか、日本の多民族化・多言語化についての研究では、『日本の言語景観』や『顕在化する多言語社会日本』等の編著があり、2004年には特別展「多みんぞく」を企画されました。また、北欧・バルト地域の民族語政策も研究対象とされており、2006年には、エストニア共和国から功績を認められ、テラ・マリアナ十字勲章を授与されました。2011年から約2年間、本誌編集長でした。退職後も書籍の編集等に取り組まれるなか、特別展「先住民の宝」の実行委員を務められました。謹んでお悔やみ申し上げます。

みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)
※定員400名
※事前申込制(先着順)、参加無料
※当日参加受付あり(定員80名)

第534回
6月17日(土)13時30分～15時(13時開場)
日本人による
最初期のガラパゴス探検
講師 丹羽典生(本館 教授)



遺跡の上を走査する機材 (2016年)

【申込期間】
■一般受付 6月14日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

第535回
7月15日(土)13時30分～15時(13時開場)
情報工学研究者のフィールドワーク

【申込期間】
■友の会先行予約
6月12日(月)～16日(金) (定員80名)
【申込先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)

お問い合わせ
国立民族学博物館 広報・IR係
電話 06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6875-0401
お問い合わせフォーム https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form

友の会
お申込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

友の会講演会
参加形式
①本館第5セミナー室(定員90名)
②オンライン
友の会会員:無料
一般(会場参加のみ):500円
※事前申込制(先着順)
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第537回 6月3日(土)13時30分～15時
文化のなかでまもられるキツネザル
―マダガスカルにおける霊長類と人との関係
講師 市野進一郎(本館 特任助教)

第538回 7月1日(土)13時30分～15時
つないでほどく ―アイヌとシサム

講師 北原モコツウナン(北海道大学 准教授、本館 特別客員教員)
※講師はオンライン登壇
司会 齋藤玲子(本館 准教授)

本講演会では、アイヌとシサム(和民族)の関係を考えます。多くの人は、自分の属性(マジョリティ/マイノリティ)やルーツ、歴史との関わりを、常には意識していません。民族共生=アイヌとシサムの関係調整・和解を具体的に進めていくため、ふだんは意識しない自分の立ち位置について考えてみませんか。

東京講演会
友の会会員:無料、一般:500円
※事前申込制(先着順、定員50名)
※オンライン配信はありません。

第134回 6月24日(土)13時30分～15時
人はなぜ共に歌うのか?
―インド山岳民族ナガの
伝統ポリフォニーと共生社会

■一般受付 6月19日(月)～7月12日(水)

みんなくウィークエンド・サロン ― 研究者と話そう

会場 本館展示場(ナビひろば)
※定員なし(ご自由に参加いただけます)
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

7月9日(日)14時30分～15時
ウズベキスタンにおける
考古学調査の最新情報
話者 寺村裕史(本館 准教授)

7月23日(日)14時30分～15時15分
人間にとって狩猟とは何か
話者 池谷和信(本館 教授)

講師 岡田恵美(本館 准教授)
会場 モンベル御徒町店4階サロン

学校をはじめとした式典において合唱は欠かせません。しかし社会人になると、集団で合唱する機会が減った方も多いのではないのでしょうか。インド北東部・山岳民族ナガの農村社会では、人が集まると自然と合唱が始まります。棚田での田植え、収穫、様々な場面で重なりあつた声が響き、相互扶助の精神が歌のなかに息づいています。人はなぜ共に歌うのでしょうか。この根源的な問いを考えます。

友の会会員限定企画です!
中牧先生の理事長サロン
6月3日(土)15時30分～16時30分
会場:第5セミナー室(予定) 事前申込不要
千里文化財団の理事長、みんなく名誉教授の中牧弘允先生主導(!)の会員交流企画です。友の会へのご要望や研究分野へのご質問に中牧理事長が答えます。

お問い合わせ
国立民族学博物館友の会 (公益財団法人千里文化財団)
電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

ウクライナのユダヤ教聖地巡礼

赤尾 光春

東ユーラシア研究国立民族学博物館拠点 特任助教

ゼレンスキー大統領がコメディアン時代に主演したTVドラマ「国民の僕」にこんなジョークが出てくる。汚職疑惑で収監されていた主人公ゴロボロチコ



巡礼者で溢れかえる聖者廟の入口(2000年)

は、不正選挙が発覚して再び大統領に復帰する。収監中にウクライナが内紛でバラバラになり、約三〇の地域がそれぞれの政治的主張を掲げた自治政府を組織したことを彼は知る。ウクライナの地図の中央にダビデの星が描かれた地区について側近に尋ねると、「こちらはウマニ・ユダヤ自治共和国。主要産業は巡礼です」との説明を受ける。ウマニとは首都キーウとオデーサの間地点にある、人口一〇万人ほどの地方都市である。ユダヤ暦の新年(九月か一〇月)になると、この町の一角は黒装束のユダヤ教徒で埋め尽くされる。彼らが目指すのは、ユダヤ教敬虔派の導師の一人、ブラツラフのラビ・ナフマンが眠る墓である。巡礼の伝統はソ連時代に途絶えたかに見えたが、ペレストロイカで海外からの渡航が解禁されて劇的に復活し、今や期間中にはイスラエルをは

じめ世界中から数万人のユダヤ人が訪れるイスラエル国外最大のユダヤ教聖地となっている。

経済的恩恵の陰で

ユダヤ人巡礼者は当初、町の中心部にあるホテルや行政にあてがわれた大学の寮などに宿泊したが、やがて聖地周辺では民泊が自然におこなわれるようになった。わたしは二〇〇二年から翌〇三年までキーウに滞在してウマニを度々訪れては住民と巡礼者に聴き取り調査を実施したが、ロシア語とヘブライ語が話せたため、両者間の民泊契約の仲介をすることもめざらしくなかった。仲介を通じて明らかになったのは、巡礼者と地元住民のあいだに根強く存在する相互不信の感情である。最初に決めていた値段と違う、宿泊日数が違うといったコミュニケーション



ユダヤ教の聖地を訪ねてみました



ユダヤ人巡礼者と民泊の交渉をするウクライナ人女性(2000年)

ケーション上の齟齬の他、家具の破損、蛇口の締め忘れ、火の不始末といった苦情もよく聞かれた。

地元住民のなかには仕方なく住居を貸しているのだと強調する者も少なくなかったが、「巡礼はわたしたちの救い」「ユダヤの民がいなかったら我々は皆とうに破滅していただろう」と語る人もいた。突然降って湧いた巡礼が地域住民に多大な経済的恩恵をもたらした一方で、単なる観光と違い、巡礼、しか

も地元住民には異質な宗教の聖地巡礼であることが、ホスト・ゲスト関係をいっそう複雑にしていることも窺われた。

ホスト・ゲスト関係の逆転？

巡礼が復活して間もないころ、ユダヤ人巡礼者は町の住民の歓待ぶりに驚いたという。民俗学のいう「異人歓待」を思い浮かべれば、納得のいく話である。だが、地元住民にとって、戒律を厳格に守る来訪者が必ずしも「つきあいやすい」人たちではないことが明らかになった。初めて巡礼者を自宅に宿泊させたときに自慢の郷土料理を振る舞おうとしたが、ユダヤ教の食事規定ゆえに丁重に断られたというウクライナ人女性の一人は、複雑な胸の内をこう表現した。

「ユダヤ人巡礼者はわたしたちに大きな経済的恩恵をもたらした。でも、ひとつ残念なのは、彼らが何も文化をもたらさないうことね」

祈禱三昧だった新年の儀礼が終わると、楽師たちの奏でるユダヤの伝統音楽に合わせて踊りの輪があらちこちでできあがる。わたしは地元住民がユダヤ人の踊りや音楽に感嘆の声をもらすのを何度も耳にした。だが、住民はその様子を



土産物の露店で交渉する巡礼者(2000年)



巡礼者の似顔絵を描く地元女性(2002年)

遠巻きに眺めているだけで、踊りの輪に加わることはない。巡礼の期間中、地元住民は巡礼者の演じる伝統文化を鑑賞する立場に置かれてしまうのである。

観光地の住民は、本来、郷土の美しさや独自の伝統文化といった「真正な

もの」を訪問者に提供することによって正当な見返りを得る。ところが、この事例では、先述の女性のことばとは裏腹に、ゲストであるユダヤ人が地元住民に文化をもたらさないのでなく、逆に、ホスト役としてのウクライナ人が

文化をゲストにもたらすことができない。その結果、ホスト・ゲスト関係は専ら金銭的關係に還元されてしまい、実りある文化交流につながりにくい状況が生まれている。

戦時下でも賑わう巡礼地

プーチン大統領が「ネオナチ」とよぶ現ウクライナ政権の大統領と国防相はともにユダヤ人である。元コメディアンのユダヤ人大統領が国防を指揮する構図は、ウクライナ人とユダヤ人の歴史の絆をかつてないほどに深める契機となっている。巡礼は、コロナ禍で中止されたこともあったが、戦時下では渡航中止勧告が出されたにもかかわらず敢行された。ウクライナのユダヤ教聖地巡礼は、この戦争を通じて、異文化交流の試金石として改めて注目を集めつつある。

津波の記憶を守り、伝える

ひだか しんご
日高 真吾 民博 学術資源研究開発センター



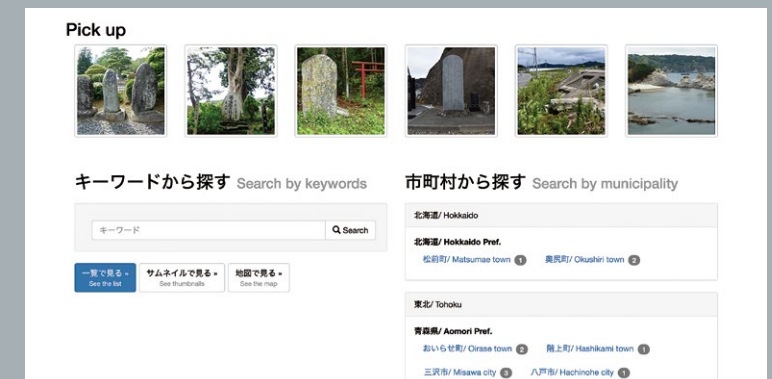
稲むらの火祭の稲むらへの火入れ(2012年)

津波の記憶を刻む文化遺産——寺社・石碑データベース

データ件数：481件

東日本大震災の経験から、日本列島に住むすべての人びとに、津波災害の記憶を自身の問題として受けとめてもらえるよう、全国各地に残された寺社や石碑、銘板などの情報を地図とともに確認できるようにしたデータベース。登録者となった人が随時データを追加できるしくみとなっている。

<http://sekihi.minpaku.ac.jp/>



データベースの検索画面

二〇一一年三月十一日一四時四六分。このとき発生した東北地方太平洋沖地震は三陸沿岸部を中心に大津波を発生させ、東日本大震災という大災害を引き起こした。この津波で大きな被害を受けた三陸沿岸部は、津波常襲地帯であり、過去一五〇年の歴史のなかでも一八九六年の明治三陸地震津波や一九三三年の昭和三陸津波、さらには一九六〇年のチリ地震津波の被害を受けている。

三陸沿岸部を襲った大津波の被害状況を見ていくと、過去の歴史を学び、大津波から逃れるための訓練をしていた地域の成功体験の話を知ることができる。例えば、岩手県釜石市では、小中学生が「津波でんでんこ」(地震が起きたら他人に構わずでんでんばらばらに逃げなさい)を標語とした防災訓練の成果を発揮し、「釜石の奇跡」とよばれる避難をおこなったニュースを、わたしは今も印象深く覚えている。こうした事

例は、過去から学び、今に活かし、未来に伝えていくという文化継承のひとつのモデルを示しているといえよう。

津波の記憶を伝えるもの

それでは、このような津波の記憶はどのように伝えられているのだろうか。わたしは津波の記憶継承の媒体として、津波碑に注目している。ここでいう津波碑とは、津波災害の記憶を伝え



過去の記憶を今に受け継ぐ

津波碑に刻まれた先人の教訓や思いを知るためには、その石碑の存在を忘れないことが大前提となる。こうした継承の活動についていくつかの事例を紹介したい。

北海道三件、東北地方一五八件、関東二三件、東海二九件、関西二八件、四国八〇件、九州・沖縄二件となっている。

宮崎県宮崎市木花に伝えられている「外所大地震追悼供養碑」は、寛文二(一六六二)年に日向灘を震源とした外所地震によって海に沈んだ外所村の記憶を今に伝える石碑である。この集落では、被災した人びとへの慰霊と災害の恐ろしさを忘れないために、概ね五〇年毎にあらたに供養碑を建て、その記憶を受け継いでいる。近年は、二〇〇七年九月一五日に七基目の石碑が建立された。

大阪市浪速区に伝えられている「大地震両川口津浪記」は、宝永四(一七〇七)年一〇月四日の宝永地震による津波と、嘉永七(一八五四)年の安政南海地震による津波の記憶を伝える石碑である。この記憶継承のため、現在も毎年八月の地藏盆に、津波碑を洗い、文字を読みやすくするための墨入れと供養をおこない、先人の警告を伝えている。

上：外所大地震追悼供養碑
下：大地震両川口津浪記
(2020年)

るために、津波に襲われた状況や被害状況、なぜ被災したのかの反省について、被災者が自分たちの子孫に伝えるために石に文字を刻み、記念碑、あるいは慰霊碑としてつくった石碑である。津波碑の所在調査でひとつひとつの石碑を見ていくと、犠牲者を悼み、こうしたことが二度と起こらないことを願いながら、石碑を建立していった人びとの熱い思いが伝わってくる。そうした津波碑が全国にどのように分布し、受け継がれているのかを知ることができるのが「津波の記憶を刻む文化遺産——寺社・石碑データベース」である。このデータベースには二〇二三年一月現在で、四八一件の津波災害の記憶に関するデータが格納されている。このうち、石碑のデータは三三三件であり、その内訳は、

和歌山県広川町にある廣八幡神社境内に建立されている「濱口梧陵碑」は、安政南海地震による津波で、醤油醸造を営む家(現在のヤマサ醤油)の当主であった濱口梧陵が稲むらに火を放ち、村人を高台にあった廣八幡神社に避難させたことを顕彰した石碑である。この逸話は「稲むらの火」として地域に伝えられ、毎年一〇月の第三土曜日には、稲むらの火祭が開催され、海岸近くにある町役場から廣八幡神社まで松明行列をおこない、海から神社までの避難訓練として、参加者の防災意識を高めている。

こうした事例は、防災の基本は、当事者が先人の経験を学びながら、主体的に災害に向き合うことが重要であることを示している。先人のことをわかりやすく、どのように伝えるのか。こうしたことを地域と一緒に考えることも博物館の役割のひとつなのではないかとわたしは考えている。



濱口梧陵像(2020年)



ワインとの出会いがあらたな人生を切り拓く

早川真悠はやかわまほ 民博外来研究員

南アフリカでジンバブエ人がワイン・ソムリエになる

ワインに詳しい人ならば、南アフリカ共和国のケープタウン近郊が世界有数のワイン生産地であることはよく知っているだろう。そのケープタウンで近年、隣国のジンバブエ共和国からやって来た黒人たちがトップ・ソムリエとして活躍しているという。本作は、四人のジンバブエ人たちがワインと出会い、人生のあらたな道を切り拓いていく姿を描いたドキュメンタリー映画である。

映画は、ケープタウンの有名レストランでソムリエとして働く四人のジンバブエ人がナショナル・チームを結成し、ワインの本場フランスで開かれるテイステイング世界選手



映画DVDのジャケット
©2020 Third Man Films Pty Ltd
販売: アルバトロス

権に史上初の黒人チームとして参加するようすを丹念に追う。映画のなかではワインの専門家やジャーナリストがインタビューに応じ、ソムリエに要求される専門知識、ワイン業界という保守的で特殊な世界、ワイン業界へジンバブエ人が参加する意義について解説を添える。「チーム・ジンバブエ」のメンバーひとりひとりも、過去の辛い経験や故郷の家族、ワインの指導者をはじめ支えてくれる周囲の人たちへの思いを自分のことばで語る。

メンバー四人それぞれがジンバブエを離れたのは、大統領選をめぐる政治暴力やハイパーインフレなどで国が極度に混乱していた二〇〇八年のことだった。多くのジンバブエ人たちがそうしたように、彼らも違法・合法の手段を問わず新天地を求めて南アフリカへ入国した。しかし、経済的には豊かでも南アフリカの治安は悪く、外国人排斥の動きも高まっていた。彼らを待っていたのは理不尽な差別や不当な暴力、日常的に犯罪に巻き込まれる過酷な暮らしだった。職探しや家探しに苦戦しながらも、彼らは各々でケープタウンへたどり着く。そこでワインに出会い、その奥深さにのめり込み、ソムリエとしての知識と技能を一から身に付けていったのだ。

「チーム・ジンバブエのソムリエたち」

原題: Blind Ambition
2021年/オーストラリア/英語、シヨナ語、フランス語/96分/DVDあり
監督: ワーウィック・ロス、ロバート・コー
出演: ジョゼフ・ダファナ、ティナシェ・ニヤムドカ、パードン・タグズ、マールヴィン・グウェセほか



真剣な表情でワインのテイステイングをおこなうジンバブエ人ソムリエ
©2020 Third Man Films Pty Ltd



フランスに到着し、いざ国際大会会場へ向かうチーム・ジンバブエ
©2020 Third Man Films Pty Ltd

映画が映し出すジンバブエ人たちの空気感

ワインにまったくなじみのないアフリカの小国で生まれ育った黒人たちが、逆境にもめげず膨大な知識と高度な技能を習得して、世界の強豪たちが集う国際大会に参戦する。この一見無謀な挑戦は、中南米の国ジャマイカのボブスレー・チームが冬季オリンピックに出場した出来事を題材にしたコメディ映画「クール・ラニング」を思わせる。

しかし、本作は決してドタバタ劇のように笑いを誘うものでも、スポ根もののように過剰な熱さで迫ってくるものでもない。また、ジンバブエの窮状や南アフリカの過酷さを強調する政治的でシリアスな内容でもない。

本作でわたしがもつとも惹き付けられたのは、チーム・ジンバブエのメンバーたちが醸し出すなごやかで落ち着いた雰囲気がかかりと映し出されているところだ。営業時間外の静かなレストランで本番を見据えた勉強会を開き、メンバー

危機と逆境における人びとの落ち着き

わたしはこの映画の主人公たちが祖国を離れた二〇〇八年、ちょうど調査のためにジンバブエに滞在していた。画面の向こう側にいる彼らが、ことばにあらわせないようなあの当時のジンバブエでの暮らしを経験していたのかと思うと、他人事とは思えず胸が熱くなった。それと同時に、混乱のなかでも淡々と明るくおらかに生きるジンバブエ人たちに支えられて毎日を過ごした、わたし自身の経験の記憶も鮮明に蘇よみがえってきた。ジンバブエ人の人柄に魅了され、彼らが醸し出す独特の空気感をなんとかして人びとに伝えたいという思いに駆られるのは、やはりわたしだけではないのだと、この映画を観て思った。

ヒトは 困り困われ暮らすもの

よしおか のぼる
吉岡 乾

民博 人類基礎理論研究部

カラコラム山中に、消滅の危機を迎えているドマーキ語がある。一部の単語が、パキスタンの国語であるウルドゥー語や、ヨーロッパなどで話されるロマニ諸語と似ていて、却って異世界感を覚える言語だ。例えばドマーキ語で「家」という単語はgarであり、ウルドゥー語でگھر ghar、ロマニ語でkherというのと類似、対応している。

言語は変化する。地域ごと時代ごとにさまざまな変容を遂げて、単一だった言語が別々の方言・言語へと枝分かれしていく様子は、生物が多様化していったのと同様だとして擬えられる。但し、生物全体が究極的な単一起源に遡れるのと異なり、言語は遡る時代の限界があり、複数起源であると考えるのが一般的だ。そうして起源ごとに分類した言語グループを、「語族」とよぶ。語族は現在、百以上あるとされる。

ドマーキ語など、僕が研究している言語の多くは、インド・ヨーロッパ語族（以下、印欧語族）の言語だ。印欧語族には、その名のとおり、東はインド亜大陸（南アジア）から、西はヨーロッパまでを本拠地とする諸言語が属す。ウルドゥー語も、ロマニ語も。英語も。

先述の「家」々や、同じく調査対象であるカシミリー語のgarī「家」は、どれも古代インドのサンスクリット語 गृह gṛha「家；妻、家族、従者」に由来している。これは更にむかしは恐らく*gʰrdʰás（*は推定される再建形をあらわす）のような姿で、「家」と「困い」とをあらわしていたらしい。家とは即ち、安全に暮らすための困いなのだ。その姿から別の変化を遂げた先では、ペルシア語 کَرْت kart「区画、地所」や、アヴェスター語 گارش gərša「魔窟」といった形と意

味になっている。

もっともっとむかしに遡るとこれは*gʰerdʰosという姿をしていたようで、専ら「困い」を意味していたと考えられる。地域によって、西方では*gʰordʰosとか、もっと西では*gʰortósとかいう形にもなった。前者はアルバニア語gardh「柵」、クロアチア語grad「街；城砦」、ロシア語город gorod「(壁のある)街」、スウェーデン語gård「農園；庭、中庭」、更には英語のyard「前庭」とgarden「庭」という二重語になっている。一方で、後者からはウエールズ語garth「崖；困い」やラテン語hortus「庭園」などが派生している。古くより文字のある地域の連綿とした言語史なので、ちゃんと追えば、道に迷う余地もない。洋の東西にかかわらず、「困うもの」から「困われたもの」へと意味が拡張したりズレたりしているのも見て取れよう。

さて、これらはすべて、印欧祖語の*gʰerdʰ-「困う」という動詞から生まれ出ている。印欧語の分布の東端である亀茲語のkerccī「宮殿」も、同じ語根から。北西端地域にあたる北欧の神話では、神の住む天上界と死者の住む地下国との中間に位置する人の世に、古ノルド語で「中央の-困い」Mið-garðrという名を付けてもいた。

世界という大きな困いのなか、我々ヒトは、街という中くらいの困いを作り、農地という困い込んだ土地で作物を育て、城・宮殿であれ家であれ、小さな小さな困いに暮らしているのだなあ。

図「インド・ヨーロッパ諸語の『困い』語彙」は下のURLもしくは2次元コード(QR)で<https://www.minpaku.ac.jp/research/publication/column/gekkan/media/2023-06>



『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく 2023年6月号

第47巻第6号通巻第549号 2023年6月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 三島禎子(編集長) 池谷和信 上羽陽子
岡田恵美 中川理 吉岡乾

制作・協力 公益財団法人 千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係をお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



月刊みんぱく

2023年
6月号

編集後記

『月刊みんぱく』の制作にかかわってくださった方が相次いで他界された。古くからの本誌の愛読者には田主誠^{たぬしまこと}さんの版画を楽しみにされていた方も多かったにちがいない。田主さんは1982年1月号～1994年4月号「民話の世界1～148」と1994年5月号～2004年3月号「民族博物誌1～115」で挿絵を描いてくださっていた。また山本圭吾^{やまもとけいご}さんはデザイナーとして2021年7月からのリニューアル号全体の骨格を作ってくださいました。両氏ともにほんとうに残念なことである。この場をお借りして生前のご功績を偲び、ご冥福をお祈りしたい。

本号をもって、編集長交代となる。ユニバーサルデザインに配慮した誌面作成や環境負荷軽減のグリーンプリンティング認定の取得、さらに追加情報にアクセスできる二次元コード(QR)の利用、過去の『月刊みんぱく』を閲覧できる「月刊みんぱくアーカイブズ」の製作と公開など、新時代の雑誌作りに取り組んだ。

2024年にはみんぱく創設50周年を記念して、『月刊みんぱく』の装いも一変する。今から楽しみである。(三島禎子)

次号の予告 7月号

特集「人類みなハンター」(仮)

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

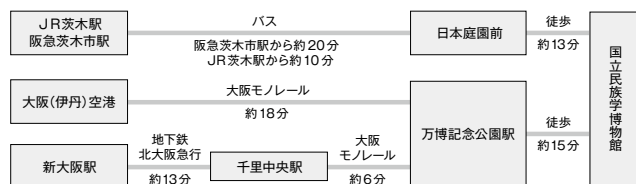
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は翌日が休館日)
年末年始(12月28日~1月4日)

主要ターミナルからのアクセス

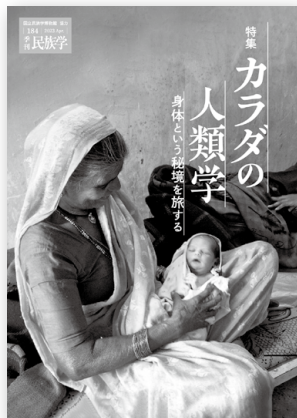
本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>





表紙「インドの村で生まれたばかりの孫を抱く祖母」
写真：松尾瑞穂(国立民族学博物館准教授)

A4判・104頁 2023年4月30日発行

最新号 『季刊民族学』184号
ISBN 978-4-915606-86-1

【特集】

カラダの人類学

—身体という秘境を旅する

各個人が互いに独立しているとみなす近代の身体観から脱却し、「穴だらけ」で周囲の環境と相互に関わり合う身体観、病気観、死生観など人類学的知見をとおして、謎に満ちた身体を探究する。

松尾 瑞穂／戸田 美佳子／安井 眞奈美
樫永 真佐夫／碓 陽子／岩佐 光広／松嶋 健
〈特別対談〉内田 樹×広瀬 浩二郎

連載 フィールドワーカーの布語り、モノがたり 第2回
インドのアジュラク

—地域社会における染色と職人の変化 金谷 美和
ほか



『季刊民族学』183号
ISBN 978-4-915606-84-7

【特集】

民藝

—人とモノとが会うとき

今、なぜ「民藝」なのか。
民族学、民俗学、民具学などの隣接領域を横断しながら、民藝という“まなざし”の成立から現在までの展開を紐解く。

〈特別対談〉吉田 憲司×濱田 琢司
濱田 琢司／鄭 銀珍／加藤 幸治
増井 敦子／小野 絢子／鈴木 禎宏
白鳥 誠一郎／鞍田 崇
ほか

182号 ISBN 978-4-915606-83-0

【特集】モンゴルの写真家インジナーシの世界

181号 ISBN 978-4-915606-82-3

【特集】沖縄—今に生きる記憶

180号 ISBN 978-4-915606-80-9

【特集】嗜好品—つくる・映える・やみつきになる

講読方法

『季刊民族学』は国立民族学博物館ミュージアム・ショップで販売しております。

国立民族学博物館友の会の維持会員、正会員のみならずには、年間4冊お届けしております。

ご購入は一般価格：2,750円(税込)、会員価格：2,200円(税込)。郵送の場合は別途発送手数料をご負担ください(会員は不要)。

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ
オンラインショップ「World Wide Bazaar」
<https://www.senri-f.or.jp/shop/>
E-mail shop@senri-f.or.jp



国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)
電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

